道元思想学会　第一回討論会

「さとり」はあるのか、ないのか。

角田泰隆

＊今日は、待ちに待った討論会の行われる日だ。まあ、よくも、このような企画を考えたものだ。「さとり」という問題は、論議する問題ではないような気もするが、いや、そんなことを言えば、その体験主義のような宗門の体質がいけないのだ、という声も聞こえてきそうだ。

そう、「さとり」と言えば、仏教においてはやはり重要な問題である。釈尊も三十五歳のときにブッダガヤーの菩提樹のもとで瞑想し「さとり」を開かれたというし、道元禅師も中国の如淨禅師のもとで「身心脱落」されている。その内容はいったい何なのかということは、仏教徒にとって、そして宗門人にとって重大な問題だ。「さとり」というのは、やはり主観的な問題であるような気もするが、であるからこそ、自分の考えをしっかりともつことは大切であるに違いない。

そういえば、『大法輪』の四月号で、「さとりとは何か」という特集をしていた。皆、てんでわれわれのことを言っていたが、仏教の「さとり」は、時代により、教義により、解釈の違いがあるのだろうか。

「さとり」をめぐる仏教史における論議は少なくない。例えば、中国宋代における看話禅（大慧宗杲）と黙照禅（宏智正覚）の対立、日本江戸期の曹洞宗の宗統復古運動における卍山道白と独庵玄光・天桂伝尊らによる嗣法論争、近くは昭和期に入って忽滑谷快天と原田祖岳との間に起こった正信論争等である。「さとり」はあるのか、ないのか、というような単純な論争ではなかったことは言うまでもないが、「さとり」をめぐる論議であったことに違いない。

宏智は、悟りを説かなかった。しかし、坐禅を重んじた。つまり、坐禅することがそのまま悟りである、と説いた。これに対して大慧は悟りを強調した。

卍山は、「得道明心の宗匠」（立派な師匠）も「契心証会の学人」（すぐれた弟子）もなかなか見いだすことができないという時機観に立って、「さとり」よりも形式を重んじて嗣法を認めようとした。これに対して独庵は、同じ時機観に立ちながらも、真理は森羅万象の上に存するとして、これを通じて真理を悟れば、それが嗣法であるとした。この両者は決して争ったわけではないが、独庵下の天桂は厳しく卍山を批判した。それは卍山寂後ではあったが、特に「未悟の嗣法」を徹底的に批判した。天桂は「さとり」や「道理」の追求を重んじた。

曹洞宗の、師家の禅風に依った宗意安心論は、両祖の教義を基盤としつつ、なお接化の上で公案禅受容の立場に立つか否かによって争われた。それは昭和期に入って忽滑谷快天と原田祖岳との間に起こった正信論争にまで及んだ。

そういえば私も学生時代、「さとり」をめぐって、たびたび親友と論議した。彼の師は、原田祖学老師が認める高徳の師であったし、私は学生時代、沢木興道老師の著書（講義録）を読んで心酔していた。かれは「さとり」はあると言い、私はないと言って、夜を徹して議論することもあったことをなつかしく思い出す。

そして、今また「さとり」についての論議が行われる。

今日のシンポジウムは、道元思想学会の討論会だから、道元禅師の「さとり」について中心に論議があるのだろうか。

さあ、どのような論議があるのか楽しみだ。

一九九五年七月十三日（水）　晴れ

道元思想学会　第一回討論会　午後一時　開会

〔司会〕私、司会をつとめさせていただきます、久保村でございます。皆さまのご協力を賜りまして、有意義な討論会といたしたいと思います。よろしくお願いいたします。

さて、ご承知のとおり、近年、この駒澤大学におきまして、道元禅師の思想をめぐって、種々の論議が巻き起こりました。これについては後ほど小林先生より簡単に説明して頂きたいと思いますが、そのような経過のなかで、この「道元思想学会」が発足し、今回、第一回の研究発表会ならびに討論会が開催されることになったわけでございます。

今日の午前中の発表では、道元禅師の修証観の問題、十二巻本『正法眼蔵』の問題、「身心脱落」の時期やその内容の問題等、さまざまな発表がなされましたが、やはり問題の焦点は、道元禅師の「さとり」の問題にあるのではないかと、あらためて感じましたようなわけでござ

いまして、今日の討論会のテーマが〝「さとり」はあるのか、ないのか〟とされたことも、そのような現状での問題意識を踏まえたものであろうかと思います。

是非、活発な討論がなされることを期待いたしますが、その前に小林先生より、近年の論争について、ごく簡潔にお願いしたいのでありますが、ご説明をお願いいたします。学生さんにも分かり易いように、噛み砕いてお願いいたします。

〔小林〕噛み砕いてというと、実にむずかしいのですが、道元の……敬称を略しまして、道元と申し上げさせていただきますが……道元の思想的な母胎ですね、道元の思想的母胎は何なのかということが、論争のきっかけになったと私はおさえております。

もう本学をお辞めになりました山内舜雄先生が、大正大学の硲慈弘先生の論文を取り上げて、道元と日本の中古天台の本覚法門との密接な関係を指摘されたのです。日本仏教、特に鎌倉仏教研究の権威である田村芳朗先生も、道元と天台本覚思想との関係、つまり類同点が多々あるということを指摘されています。類同点と言っても、批判・反論においての類同点であると言っておりますが、とにかく、道元は天台本覚思想をその根底にもっているとおっしゃった。これに山内先生が同調されたのに対して、こんどはチベット仏教の権威である山口瑞鳳先生が批判をしたんです。

どのような批判かというと、道元の著作の中での表現に、たまたま天台本覚思想の人々と類似の表現があるからといって、その思想に根底をおくというような判断には問題があると言われたわけです。つまり、山口先生は……ちょっと難しくなりますが……田村先生が本覚思想と類同点があるとして例に引いている道元禅師の文の全ては「実体的思考を排した点」から述べられているものであり、この実体的思考を排したのがインド仏教の正統であって、道元はこれを正しくつたえられたのであると言われたのです。

わかりやすく言えば、道元は正統的な正しい仏教を根底にもたれているのでこそあれ、本覚思想に根底を置くのではないと主張されたのです。

このような考え方をさらに押し進め、実際に論争の火付け役になったのが、やはり袴谷憲昭先生でしょうね。袴谷先生は、道元が本覚思想そのものを厳しく批判された事実を率直に認めるべきだと主張し、この本覚思想こそ道元が生涯を貫いて主張したと思われる根本的な立場であり、従来、道元の修証観の特徴を表す標語として掲

げられてきた「本証妙修」などという語は捨て去るべきだと主張されたのです。

〔司会〕お話の途中ですが、その「本証妙修」というのはどういうことですか？

〔小林〕まあ、分かりやすく言えば、「本来さとっているからこそ修行するのだ」ということでしょうね。この「本証」、つまり「本来さとっている」という考え方はやはり本覚思想を根底におく考え方でしょうね。もちろん、反対意見もおありかと思いますが……。

もうすこし話を続けますが、この袴谷先生の主張が、当時、曹洞宗で大きな問題となっていた……もちろん今も真剣に取り組んでおりますが……人権問題と関わって、注目されました。つまり、差別事象を生み出した思想的背景は、鎌倉期に始まる比叡山を中心とする本覚思想の流行・定着にあり、この本覚思想こそ差別を生み出し温存してきた思想であり、道元はこれを徹底批判したのに対し、以後の宗門人がこれを曖昧にしたために差別を生み出したのだと指摘されたわけです。

これに対して、特に、先の「本証妙修」批判に対して宗学の先生より反論がなされました。たとえば伊藤秀憲先生は、道元の説く「本証」と、自然外道と同一視されるような本覚思想とは違うということ、そして、道元の著作によってみても「本証妙修」は十分な根拠をもって認められ得ると反論しています。

これに対してさらに、袴谷先生は、道元禅師の初期の撰述……つまり七十五巻本ですね……これによれば、「本証妙修」は十分な根拠をもって認められ得るかもしれないが、この七十五巻本は、後に道元自身によって書き改められるべきものであったのであり、我々は本覚思想をいっさい排除している十二巻本の『正法眼蔵』によるべきである、と反論されたのです。そして、七十五巻本から十二巻本へは、思想上の決定的な変貌が認められるとし、十二巻本こそ道元が最晩年に認めた唯一最高の真実の考えを述べた親撰であると主張されたわけです。

この後、ご存じのように、論争は『正法眼蔵』の書誌的な問題へと展開していったのですね。

残念なことに、この「本証妙修」の問題、つまり道元の修証観についての論議は十分になされないままに、『正法眼蔵』の書誌的な問題へと論争の焦点が移っていってしまったわけです。道元の修行とか「さとり」については、もっと論議しなければならなかったと思うんです。

ちょっと長くなってしまいましたが、このような捉え

方が的を得たものかどうかわかりませんが、私は近年の宗学論争については以上のようにおさえておる次第です。

〔司会〕どうもありがとうございました。小林先生より、ご説明いただきましたが、関係の先生……は、今日は残念ながらお見えになっていないようですね。

それでは、道元禅師の修行とか「さとり」について、ただ今の「本証妙修」の問題も含めて、どうか活発な論議をお願いしたいと思いますが、今日は、短大仏教科の学生さんも大勢参加されていますが、どうか学生さんも活発に意見を述べていただきたいと思います。

さて、そこでいきなり核心にふれるような質問かと思いますが、道元禅師にとって「さとり」とはどのようなことだったのでしょうか。宗学のご専門の先生、いかがですか。柴田先生、いかがですか？　非常に難しい問題だと思いますが……

〔柴田〕たいへん難しい問題だと思いますが、やはり、よく言われるような「転迷開悟」というようなものではなかったとするのが、伝統的な捉え方でしょうか。つまり、悟った後は、迷いがすっかりなくなってしまって、すばらしい境涯になったというような、心境の転換というものではないというのが、宗学での一般的な見方でしょうね。よく言われるように、修行のところに「さとり」があるというか、「修証一等」という言葉もありますが、そういうことだと思いますね。

〔司会〕その「修証一等」というのは、先ほどの「本証妙修」というのと違うのですか？

〔柴田〕どちらも『辦道話』の中に出てくる言葉ですが、「本証妙修」という言葉は、つながったかたちでは出てまいりません。「本証」と「妙修」と別々に出てきます。だからといって「本証妙修」と言うのはよくないとは私は思っておりませんが、「本証」にはやはり「本来さとっている」という意味あいがあるでしょうね。つまり、迷っているものが修行して悟るというのではなく、本来悟っている、だからこそ修行しなければならないと、そういうことでしょう。「妙修」の「妙」という字には、本来悟っているということが根底にあって、「さとり」を求める修行ではないという意味が含まれると思います。

それに対して「修証一等」というのは、文字どおり「修行」と「さとり」がひとつであるということで、修行のところに「さとり」が現成するという意味になります。

ただ、基本的には、同じことでしょう。「本証」というと、本覚思想的考え方だとおっしゃる方がおりますが、私は「本証」というのは「本来さとっている」のであって、「もともと、はじめから、さとっている」ということではないと思います。「本」というのは本来的なあり方を言うのであって、それは「自然」ということではないと思います。「本来」というのと「ありのまま」というのとは違うと思いますね。

〔司会〕ありがとうございました。今日は特別に師家の方もおみえになっていますが、原老師、日頃、僧堂で坐禅の指導をなさっておられる立場から、いかがでしょうか？

〔原〕だいたい、「さとり」が、あるのか、ないのか、ということだが、今日の討論会の論題じたいが悪い。「さとり」というのは、そもそも、有るとか無いとかいう問題のものではない。我々の心境の変化を言うのではない。「さとり」というのは、我々が宇宙とつながっている、そのあり方をいうのだ。

〔司会〕老師のお立場から、そのようにおっしゃることは、よくわかりますが、では「さとり」というのは具体的には、どういうこととお考えですか。

〔原〕その、お考え、というようなことではないんだな。つまり、われわれの身体のありのままの働きだ。心臓が動いている。肺で呼吸をしている。物を食べれば胃が消化し腸が吸収してくれる。これは我々の意志によって動かしているのではない。坐禅をしているとよくわかるが、眼は、見ようと思わなくても見えているし、耳は聞こうと思わなくても自然ときこえてくる。匂いを嗅ごうと思わなくても、匂いを感じるじゃないか。味わおうと思わなくても味わえる。感じようと思わなくても、暑い寒いを感じるじゃないか。我々のこの身心は、意識の思うままではない。まさに生かされているのだ。宇宙とぶっつづきだ。それに気づくことが「さとり」だ。「さとり」というのは、そういうことを言うのだよ。

〔宮下〕それでは自然外道ではないですか。

〔原〕いや、自然外道ではない。

〔司会〕あのー、その「自然外道」というのは何ですか？

〔宮下〕『辦道話』や『正法眼蔵』「即心是佛」の巻などに出てくる道元の批判対象ですよ。道元は「先尼外道」と言っていますが……

〔司会〕その辺は重要だと思うのですが、もう少し詳しく説明していただけませんか。

〔宮下〕「先尼」っていうのは北本の『涅槃経』三九に出てくる先尼梵志のことで、釈尊と「我」に関する論議をして、結局、先尼が負けて釈尊の弟子になったという話がでてきます。先尼は、どのように説いていたかというと、我々の肉体の中に「我」というものがあって、肉体は消滅しても霊魂は死後も不滅であると説いたのです。釈尊がこれに対して「無我」を説かれたことは言うまでもないことでしょうが……。

〔司会〕で、その、先尼が霊魂の実在を説いたということと、先ほどの「自然外道」ということとはどのような関係があるのですか？

〔宮下〕それは、『辦道話』でも『正法眼蔵』「即心是佛」でも言っていますが、その肉体のなかにある「我」というか「霊魂」というか「霊知」というか、まあ、いろいろな言葉で言われていますが、それが苦楽をわきまえたり、冷暖を自知したり、痛痒を了知したりするというのです。あるいは、「見聞覚知」ですね、見たり聞いたり知覚したりするというのです。先尼外道は、そのような働きをもった「我」が、我々の肉体にあることを知ればよい。そのように「知る」ことが「さとり」だというのです。だから修行の必要もない。道元は、このような考えをきびしく批判しています。先ほどの原老師のおっしゃったことは、このような考え方に近いのではないですか？

〔原〕いや、そんなことはない。我々も、そのような「我」の実在を言っているわけではない。修行だって必要だと言っている。だから坐禅をしているのだ。

〔宮下〕しかし、おっしゃっていることは何か道元が批判したものと通じるものがあると思いますが……

〔原〕いや、「さとり」というのは、我々の心境の変化などという、そのような問題ではないということを言っているのですよ。我々の存在が、大自然そのものであるということは動かし難いということです。我々の「吾我」と

いうものは実に些細なものであるということを認識しなければいけない。そこから「吾我を離れる」ということが出てくる。そこが大切だということです。吾我を離れずして「さとり」はない。

〔福沢〕あのーですね。自然と一体というのは、さておくといたしまして、先ほどの原老師の、「眼は見ようと思わなくても見えている、とか、耳は聞こうと思わなくても聞こえている」とかいう言い方ですね。人権問題の視点から言うとですね、きわめて問題のある言い方ではないですか？

〔原〕どういうところが問題なのですか？

〔福沢〕つまり、障害者に対する配慮がないということですよ。だいたい坐禅のスタイルですね。あのスタイルへの固執に問題がある。ああいうスタイルでないと「さとり」は開けないのですか？

〔原〕んー、まあ、そういうことではないが……

〔唐木〕私も坐禅を指導しておりますが、結跏趺坐や半跏趺坐ができない者は、あぐらのようなかたちでも仕方がないし、正座でも椅子坐禅でもいいと思うね。病床に伏せって寝たきりの人も、寝たままで、それは坐禅同様に救われなければならないと思いますね。

〔村上〕いや、私はそうは思わない。坐禅は坐禅ですよ。正座は正座、あぐらはあぐらで、決して坐禅ではない。椅子坐禅などということも、最近流行っておりますが、あれは坐禅ではない。やはり坐禅は、道元禅師が『普勧坐禅儀』で示されているようにきちんと行うのが坐禅で、そこのところは崩してはならないと思います。

〔司会〕ちょっと、議論が坐禅に関することになりまして、当然それもたいへん重要な論議になると思うんですが、いまは「さとり」の内容ということについての討論だと思いますので……

〔柴田〕先ほどの「我」の話にもどるのですが、仏教が「無我」を説くということについては、おそらく一致していたと思うのですが、これについては是非確認しておくべきだと思います。それでよろしいんですよね。

最近はオウム真理教の問題で、オウムが自ら仏教と言

っているので、実に仏教としては迷惑をしているわけですが、やはり、オウム真理教と仏教の違いは、袴谷教授も言われているように、「無我」を説くのかどうかということを基準として、その違いを明確にしないといけないと思います。オウムの考え方は「我」を実体視するものであることは明らかですから、この「無我」かどうかということで、一線を画することが重要だと思います。ことに「出家」だとか「布施」だとか「解脱」だとか、同様の言葉を用いておりますので、違いを明確にすることが重要です。特に「解脱」という言葉については、「さとり」とも関係する言葉でしょうから、再確認しなければならないでしょう。とにかく、仏教の中にも、霊魂を実体視するような考え方が依然として根強くあるわけですから、我々自身も大いに反省する必要があります。

〔沢田〕実はその「我」という問題ですが、瑩山禅師は『伝光録』の中で、この「我」ということを肯定的に取り上げておられまして、釈迦牟尼仏章の「釈迦牟尼仏、明星を見て悟道して曰く、我と大地有情と同時に成道す」という本則の拈提の中で、この「我」というのは釈迦牟尼仏ではなく、釈迦牟尼仏もこの「我」より出生してきたのである、と言われています。この「我」は、アートマンのごとき実体的存在をいうのではなく主体的な当体を言うのだと思います。「我」ということや言葉が無条件にいけないということではなく、実体的存在と考えることがいけないとですね……。

〔宮下〕やはり、瑩山は、本覚思想的考え方をもっていたんではないでしょうか。道元があれほど批判したのにも関わらず、瑩山はそのような考え方をすてることができなかったのでは。

〔中村〕私は、道元だって本覚思想だと思いますよ。仏教史の流れの上から見ても、明らかに本覚思想だし、撰述のなかにもそれは表れている。

本覚思想のどこがいけないのか、私にはよくわからない。やはり、本覚思想と日本中古天台の本覚法門とは分けて考えるべきでしょう。本覚法門は、現実肯定・修行無用の自然外道に次第に堕落したといわれますが、本覚思想は決して修行を否定したわけではありませんから。それに、本覚思想が差別を助長したと言うけれど、差別を助長したのは直接的には三時業でしょう。本覚だから現実を肯定したというのはおかしい。むしろ本覚は、現実を否定して本来のあり方を求めるのではないですか？

〔沢田〕今、瑩山禅師のお名前がでましたけれど、宗門はもっと瑩山禅師の研究をしなければいけない。先ほど瑩山禅師の「我」について意見が出されましたが、あれはもちろん、霊魂ではない。実体的存在を言うのではない。実体ではないけれど主体的なるものですよ。道元禅師の言われる「佛性」とでもいうようなものですよ。

〔中村〕沢田老師の言われることに賛成ですね。これからは瑩山ですよ。学者も瑩山をもっと研究しなければいけない。瑩山こそ偉大な人物であったと思いますがねえ。

〔沢田〕瑩山、瑩山と呼びすてにしないでください。瑩山禅師です。

〔中村〕いや、どうも。

〔原〕瑩山禅師は確かに、両祖の一人ですから、われわれも尊んでいるわけですが、しかし瑩山禅師は道元禅師下の法孫じゃないですか。道元禅師を立ててどこがおかしいのですか。

〔沢田〕原老師、我々だって道元禅師のことを非常に尊敬しておりますよ。ただ、あなた方が瑩山禅師のことをなおざりにするからいけない。

〔司会〕まあ、ここは、そのようなことを論議する場ではありませんので、両老師、どうかそのくらいにしていただいて、「さとり」の話にもどしていただきたいのですが、他の方、何か発言はございませんか？

〔清水〕ちょっと、よろしいですか。私は、「さとり」というのは、自己を知る、ということだと思うんですね。自己とは何か、自己の存在を如実に知る。ということだと思います。

つまりですね、人間が生まれるということはどういうことなのか。そもそも、我々が生まれてきたこの世界というのはどのような世界か？　そういう問題の認識ですね。私は科学者ではありませんので、大ざっぱなことしかわかりませんが、まずこの宇宙。宇宙は拡がっていると言われていますが、ということは最初は狭いところに圧縮されていたと考えられている。それが、約百二十億年前に、ビッグバンという大爆発をおこした。この大陽系が、つまり地球が誕生したのが、今から約四十六億年

前であると言われておりまして……

〔司会〕ちょっと話の途中ですが、先生のご発言もあまり今日の討論の趣旨と関わらないようなのですが……

〔清水〕いえ、大いに関わることですのでもう少し、話させていただきたいのですが、どこまででしたか……、そう地球が誕生したのは四十六億年前でありまして、約四十億年程前に、生命が誕生したというんですね。この生命がいったいどのように地球に誕生したのか、宇宙から飛来したのか、地球で生まれたのか、いずれにしても自然発生したとしか思われないのですが、いったい「生命」とは何なのかということが問題です。

そして最も重要なのはですね、我々人間がもっている自我意識ですね。これはいったい何なのか。「こころ」と言うのは何で、「考える」ということは何で、そしてです、「さとる」ということは何なのか。「さとる」ということがそれほど重要な問題なのか。

この生命の不思議を考えた時に、先ほどの老師のお話ではありませんが、「自然」ということでいいと思うのですね。外道といわれるかも知れませんが、この「自然」のあり方こそ、実にすばらしいものであると思います。

「さとり」はあるのか、ないのか。（角田）

ちょっと、仏教とか道元禅師とかから離れてしまいましたが、「さとり」などということ自体もどちらでもよいことのように思うのです。どちらでもよいなどと言いますとお叱りをうけるでしょうが、もう少し広い視点から見ることも大切だと考えております。

先ほど人権問題の話も出ましたが、宇宙の歴史、それから人類の歴史の中で、人間社会の考え方もいろいろに変化してきたわけですね。例えば、不平等があたりまえだった時代から、基本的人権を重んずる時代になった。これは人類の歴史でも、二百年ほど前からだと言われています。もちろん、基本的人権を重んずる考え方は、たいへん重要な考え方であり、この平等思想は、知的生命体の思想のすばらしい帰結であると思いますが、地球上の生態系が、非常に長い時間の流れの中で、動物にしても植物にしても非常に差別的な環境の中で、進化してきたということは事実だと思います。また、環境ということも出ましたが、いま問題となっている環境問題にしても、実にけっこうなことだと思いますが、人間社会中心の、人間の都合による問題になってしまっているような気もします。

最後に「さとり」ということに敢えて触れれば、「さとり」ということがもしあるとすれば、それは、人間は、人間社会のなかでいろいろな人間がつくりだした物事に

縛られている、それが「さとり」ということの障害になっている、その縛られているということに気づき、自由になろうとすることが「さとり」であると思います。

〔司会〕あまりに広大無辺の話になってしまいまして、ちょっと戻したいとおもうのですが。ほかの方いかがでしょうか。

〔福沢〕清水先生のお話の視点は、確かに重要だとも思いますが、しかし現実的には、苦悩の多い現実の生活があるわけで、この現実をどうするのか、ということから仏教は出発したと思うのですね。宇宙とは何かとか、生命とは何かとかいう問題は、釈尊が問題にするなと言われた形而上学的問題であると思います。しかし、清水先生のおっしゃる趣旨はよくわかりますし、広い視点をもつことは大切であると思います。

〔柴田〕さきほど清水先生が、縛られていることから自由になることと言われましたが、この我々の現実の生活は非常に苦しみに満ちたものであるわけですね。それが釈尊の四諦説の中の苦諦であり、四諦説の大前提となっていると思うのですが、「さとり」というのは、これらの苦しみから解放されることではなくて、むしろ生・老・病・死という避けられない苦しみ、誰もが例外なく必ず受けなければならない苦しみを背負っている我々が、そこから逃れること無く、むしろその中で、苦しみや悲しみの中で、自覚をもって生きていく、そのような覚悟のことを言うのではないかとも思うのですね。どうでしょうか？

〔清水〕柴田先生のおっしゃるとおりで、ちょっと先ほどの私の言い方がよくなかったかも知れません。ただ、苦しみや悲しみを克服する道というのは、ただ覚悟して耐えるというのではなくて、やはり自由になる正しい道があると思うのですね。まあ、それが四諦説でいえば、道諦すなわち八正道でしょうか。

〔司会〕まあ、いろいろな意見が出ておりますが、このへんで、道元禅師をめぐる「さとり」の問題についてもご意見をうかがいたいと思いますが、いかがでしょうか？

〔柴田〕「さとり」ということであるかどうかわかりませんが、道元禅師には「身心脱落」ということがございますね。これは、いくつかの道元禅師の伝記や、『永平広録』や『御遺言記録』等にも出てきますし、『正法眼蔵』の中

にも出てまいりますが、この「身心脱落」ということが、体験的な、経験的な出来事として実際にあったのかどうか。あったとすればそれは何時なのか。どのような内容だったのか。等の問題があると思うのですが、この点について議論があればと思いますが。

〔司会〕その「身心脱落」というのは、どのような機縁なのですか？　小林先生ちょっと説明していただけますか。

〔小林〕道元禅師が悟られたときの話として『行業記』や『行状記』などの伝記の中に出てくるのですが、道元禅師が中国に渡られて、天童山の如淨禅師のもとで修行されていたときの出来事として記されています。

それは、天童山での早朝の坐禅の時、如淨禅師が居眠りをしている修行僧を叱って、「坐禅を行ずることが、身心を脱落するということである。それなのに居眠り坐禅をしていてどうするのだ」と言われたのを聞いて、道元禅師はその時ハッと悟りを開かれたという話です。

実はこの話を疑っている学者も多いのです。杉尾玄有先生は、この話は伝記作者による虚構ではないかと言われていますし、石井修道先生も後人の手によるものだとして、この話は道元の教えを誤る最悪の話ではないかと言われています。

杉尾先生は、この話を「叱咤時脱落」と命名して、伝記作者の虚構とし、これに対して『正法眼蔵』「面授」の巻で示されている宝慶元年五月一日に道元禅師は身心脱落されたという説を主張し、これを「面授時脱落」と命名していますね。いったい「叱咤時脱落」なのか「面授時脱落」なのかということが、やはり論議になりました。

〔司会〕それは、この「さとり」があるか、ないか、ということと関連するわけですね。

〔小林〕ええ、わかりやすく言えば、「叱咤時脱落」説というのは、瞬間的な、経験的なものとして「さとり」を認める立場ですし、「面授時脱落」は師資の出会いということを重視する立場で、その後の随身の中で「さとり」が次第に深められていくというか、共に修行するなかで仏法が親しく伝えられていくというように捉える立場になると思います。「面授時脱落」については、いろいろな論議がありますが、「修証一等」という立場に立つのではないでしょうか、つまり「さとり」というのは「ありよう」を言うのであると。

〔司会〕つまり、「さとり」というのは、瞬間的・経験的なものか、あるいは「ありよう」つまり状態であるのかということですね。

〔小林〕そうです。「さとり」はない、というのではなくて、「さとり」とは状態を言うのだということです。

〔村上〕あのー、今の意見では、「さとり」というのは、あるのか、ないのか、どちらなのかという二者択一のような感じをうけるのですが、この問題は二者択一ではなくて、二者ともに認められると思います。

道元禅師は、『辦道話』や『正法眼蔵』・『正法眼蔵随聞記』などで、「さとり」とか「得道」とか「解脱」とかの言葉を使われていますが、どうもそれらは、修行の中に「さとり」が現われているというような「ありよう」を言ったものではなく、おおよそ瞬間的な、経験的なものと思われるのですね。しかし、かたや道元禅師は「修証一等」と言われる。「修証一等」でありながら、何か「さとり」というような機縁があるというか。

〔原〕もちろん、「さとり」はあります。「さとり」がなければ仏法は伝わらないですよ。『辦道話』で言われていますが、仏法というのはですね「得道明心の宗匠」に「契心証会の学人」が付き従って正伝するのですよ。

〔司会〕それはどのような意味ですか？

〔原〕つまり、悟った師が、悟った弟子に仏法を伝えていくということです。

〔司会〕ところで、その内容なんですが、何かこう「さとり」というすばらしい発見があるのでしょうか？

〔原〕まあ、発見というのかどうかわかりませんが、「脱落」というようなものがあるわけです。納得というのか落ちつき処というのか、よい言葉が見つかりませんが、そういうことがあるわけです。道元禅師も「さとり」がない、と言われたのではなくて、求めてはいけないと言われたわけです。それは、求めるとかえって遠のくからです。求めないでただ行じてゆくところに「さとり」というか「身心脱落」ということがあるわけです。

〔司会〕それでは、先ほどの「修証一等」というのと矛盾しませんか。

〔原〕まあ、あれは、「さとり」を求めさせないための方便というか、悟っていない者には方便でしょうし、悟ったものからみれば、かつて「さとり」を求めない修行のときに、もう悟っていたのだったというように納得できるということでしょうか。

〔司会〕まあ、なんとなく分かったような分からないような、ですが、他の方で、「さとり」はないという方のご意見もお伺いしたいのですが。

〔小林〕『宝慶記』に、如淨禅師が「さとり」の吉瑞について示されている部分がありますね。坐禅をしていてすばらしい香りが漂ってくるとか、油が滴り落ちるような感覚をうけるとか。あのようなことはあるのですか？

〔唐木〕あれは、そのような体験が確かにある。あってもそれにとどまらず、さらに精進すべきことを示されていると思われるのですが、やはり道元禅師の場合も、そのような「さとり」にとどまってはいけないと教えられているのではないでしょうか。沢木老師も、そのような「さとり」ならいくらでもあったと言われて、それを問題とせず、一生坐禅をされましたが、そのへんのところが、大切だと思いますね。やはり、生涯修行で、納得だとか胸落ちだたかに関わらず、仏行を行じてゆくというところに道元禅師の仏道があると思うのですが、私は「修証一等」というのは真実であって、方便とはどうしても思えませんが。

〔司会〕私も、いろいろな意見をお伺いして、それぞれごもっともであると思ってうかがったようなわけですが、予定の時間も大幅に超過してしまいましたので、そろそろこの辺で討論会を終わりたいと思うのですが、そういえば学生さんの発言がなかったわけですが、何か意見でも感想でもありましたら、おうかがいしたいと思います。どうでしょうか？

〔学生〕はい。

〔司会〕はい、どうぞ。

〔学生〕あのー、「さとり」ということはよくわからないのですけど、坐禅の授業で、安楽の行だって言うんですけど、野原にでも寝転がっていたほうがよっぽど気持ちがいい

し、どうして、ああいうところに閉じ込もって坐禅をするのが安楽なのかよくわからないのですが？

〔司会〕どなたか、いかがでしょうか？

〔原〕君たちの言っている「気持ちがいい」というのは欲望をみたすことであって、坐禅っていうのは、君たちの欲望を満たす行為というのとは違うんだな。

〔司会〕よろしいですか？

〔学生〕はあ、まあ何だかよくわかりませんが……。

〔司会〕他になにか、ありましたら……

……

ないようですので……、それでは、時間も超過しておりますし、この辺で閉会にしたいと思いますが、今日は、「さとり」という、非常に難しい問題でありましたので、なかなかまとめるような方向にもっていくことが出来ませんでしたが、いろいろな意見が出されまして、有意義な討論会であったのではないかと思います。皆さんには、ご協力ありがとうございました。

＊さて、二時間半に及ぶ討論会であったが、けっこう退屈することなく、おもしろく聞くことができた。実に種々様々な意見が出された。やはり「さとり」というのは結局、きわめて主観的な問題であるように思う。まあ何回やってもまとまることはないだろう。

来年の道元思想学会には、第二回の討論会が行われるというが、次回はどのようなテーマが取り上げられるのだろうか。今から楽しみにしている。